

機械ばかりある倉庫のような一室でロボットの接続部分をくっ付けていると、外の方から何かが崩れる音がした。

急いで外に出てみると、目の前には僕が作ったロボット・アニーが大きな木を持ち、車庫を破壊していた。地面には無数の木の破片と車庫の瓦礫がれきが散らばっている。

「何してるんだよ、アニー！」

アニーに向かって叫ぶ。

するとアニーはゆっくりと僕の方を見た。

アニーは僕が初めて作ったロボットだ。何かを作り上げることが好きだった僕は、ガンダムのような大きなロボットを作り上げたいと思い、独学で勉強し、自分の力だけでアニーを作り上げた。『アニー』という名前は、男でも女でもない中性的な名前にしたかったからそう名付けただけで、特に深い意味は込められていない。

「ユーミーさん……」

アニーは僕の名前を呟いた。

「どうしたんだよ、急に木なんか持って車庫を破壊しだして。アニーはそんな性格じゃなかっただろう……?」

アニーに僕は近寄る。アニーは五メートルほどの大きさなので、僕は自然と顔を見上げるような感じになる。幸い僕の家は丘の上に建ててあったので、車庫以外に被害はなかった。

「もう耐えられないです、こんな生活……」

泣きそうな声で呟くアニー。その声には僕は思わず言葉を詰まらせた。

僕は生まれた時から独りだった。幼少期は育てられたみたいだが、物心ついた時にはもう両親の姿はなかった。街に出ても誰も独りの僕を助けようともせず、みんな大人は見えて見ぬふりをした。でもたった一人だけ僕に手を差し伸べてくれた人が居た。リンクという白いひげを生やしたお爺さんだった。

リンク爺さんはロボットを作る職人だった。小さなロボットからガンダムのような大きなロボットまで、色んな種類のロボットを作ることが出来た。そんな彼を僕は尊敬していた。彼のようになりたくて僕は一日中彼の傍でロボットを作る姿を眺めては見様見真似でロボットを作った。最初は大変だったし、なんでこんなことしてるんだろうって思った日もあった。でも完成したあの達成感が心地よくて、僕は夢中になって作り続けた。

『ユーミー。お前はもう一人前のロボット職人だ』

十六になった寒い冬の夜の夜、ろうそくの炎に照らされた薄暗い小屋の中でリンク爺さんは嬉しそうに呟いた。

『本当?!』

僕は嬉しくてリンク爺さんに抱きついた。

ついにリンク爺さんに追いついたんだ。そう思うと、自然と目の前が涙で滲んだ。

抱きついたリンク爺さんの身体は温かかった。このぬくもりこそが愛なのかもしれない。そう思った。でもその数日後の朝、リンク爺さんは亡くなった。

原因は分からない。でも、顔は助けてくれたあの日のように優しい顔で笑っていた。

その顔がまたいい意味で憎らしくて、その日は一日中泣いていた。

次の日から僕はまた独りになった。

また独りで生きていかなきゃいけない。

そう思うと絶望感と喪失感で何の活力も湧かなかった。

ロボットを作る為に必要な工具をぼんやりと眺める。そのときふと自分がロボット職人だということ进行を思い出した。

そして気付いた時には僕は『アニー』を作り出していた。

独りになりたくないから作ったロボット・アニー。おっとりとしていて、愚痴一つこぼさない優しい性格だったアニーが車庫を破壊し、「こんな生活には耐えられない」と言った。

「何が耐えられないんだ？ お前にはご飯だってあげてるし、一緒に話したりもしている。何も不自由なことはないだろう？」

戸惑っていると、「そうやってロボットを作り続けていることです」とアニーは声を震わせた。

「どうしてユーミーさんが新しいロボットを制作しているかは分かりませんが、私を作り上げた理由は知っています。独りになりたくないから作ったからですよ？」

一瞬の沈黙が流れる。

「なんでそれを知ってるんだ……？」

独りになりたくないなんてアニーの前で言った記憶はない。ますます頭が混乱する。

「私を作り出しているとき言っていましたよ。『僕はこれを作り上げたなら独りじゃなくなるんだ』って。喋らなくても心臓部分が出来た時点で私は生きてるんですよ」

返す言葉が見つからず、僕は黙り込む。

「そう考えたとき、なんとなくユーミーさんが新しいロボットを制作している理由がなんとな

く分かります。今は私を作り出して独りではないのに、ユーミーさんは新しいロボットを作り出してる。なんですか？ 私だけじゃ満足できないんですか」

涙声だったが、発した言葉に怒りの感情が混じっていることは手に取るように分かった。

そうじゃない、と言おうとするも、アニーが言葉を遮る。

「確かにユーミーさんには沢山のことをしてもらって不自由なことは何一つないです。でも、ロボット作り出すことに夢中じゃないですか。話し掛けても『あとで』なんて言って食事もろくに取らないじゃないですか。そんなユーミーさんのことが私は心配なんです」

一息ついて、アニーはロボット制作は辞めて二人で仲良く暮らしませんか？と言った。

知らなかった。ユーミーがそんなことを考えているなんて。僕はなんてことをしてしまったのだろうと身勝手な自分に腹が立つ。

「……ユーミーの気持ちも知らないで、ごめん」

アニーに対してそれだけの言葉しか出てこなかったが、アニーはゆっくりとしゃがみ込んで僕を優しく包み込んだ。

それから僕は新しくロボットを作るのをやめて、アニーと二人で仲良く暮らした。